

園のおたより



第 3 号

令和 7 年 6 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

良いけんかのすすめ

園長 関 由起子

先日、幼稚園で保育士や先生たち向けの研修会が行われ、埼玉大学名誉教授の安藤聡彦先生にご助言をいただきました。安藤先生のご専門は環境教育で、前附属中学校の校長でもあった方です。校長時代の附属中学校学年通信 1 年生の「良いけんかのすすめ」を紹介してくださり、けんかが生きていくうえで非常に意味深いものであることとお話してくださいました。

日々本園でも子どもたちの間でけんかが起こります。怒ったり、泣いたり、時には叩いたり、蹴ったりと、子どもたちは思い通りにならない感情を様々な方法で表現してくれます。私は子どものけんかが苦手です。理由は、どのように大人が振る舞ってよいのかわからないからであり、子どもたちがけんかをはじめると、心のなかで「はやく先生来て！」と願ってしまいます。もちろん先生はすぐに子どもたちの様子に気づき、駆け寄り、子どもたちの訴えを必死に聴き取ります。子どもたちは真剣にぶつかり合い、先生たちも子どもに真剣に向き合い、時にはクラス全体の問題として話し合い、そして子どもたちは仲直りします。A 先生は「けんかはクラスの成長を促す」言い、けんかがないクラスが良いクラスと思っていた私は、A 先生の言葉に目から鱗が落ちました。

大学生も最近、クラスメートの中でいざこざが起こると、大学教員(担任)に訴えてくることがあります。けれども幼児と異なり、自分の思いを様々な感情や行動で表に示すことは滅多にありません。幼児のようにぶつかり合うことなしに一人で思い悩み、そしてその思いが膨れ上がっていくようです。その結果、大学生の大学教員に対する訴えは、いざこざへの仲裁や解消ではなく、私の苦しい思いをどうにかしてほしい、となります。子どものように直接ぶつかり合うことを避け、一見平和にやり過ごすけれど、やり過ごした本人の心は疲弊していく、このような状況が大人の世界には広がっているような気がしました。

我が家は一人っ子(娘)ですので、夫は娘が小さいときから、「けんかの相手に俺がならなければ」といい、些細なことで娘とけんかばかりしていました。保育園に遅刻したのは誰のせい、新幹線や飛行機の窓際の席には誰が座るか、栗のケーキ(モンブラン)は誰が食べるか、今家族で見るテレビ番組は誰がきめるか、など些細なことから始まり、時には今日的課題への意見など、今でもよく対立しています。娘も成人し、最近夫を言い負かすことが出来るようになり、「パパ、間違っていたんだから謝って」と言われている姿をよく見るようになりました。私は昔から、「どっちでもいいから、早く決めてよ」と傍観していましたが、今思えば、けんかとは対等な関係の間で起こることであり、一人っ子の娘にとっては、パパとのけんかは娘の成長にとって必要だったのかもかもしれません。

前述の安藤聡彦先生の「良いけんかのすすめ」の最後は、「みなさん、ぜひ良きけんかを！」でした。なかなか仲直りできない、心のなかで根に持つタイプの大人の私にとって、子どものけんかは、安藤先生のおっしゃる

「良いけんか」であり、見習わなければならないと思いました。私も最後に「みなさん、良いけんかを！」



紙芝居

副園長 小谷 宜路

幼稚園では、紙芝居をこどもたちに読み聞かせることがよくあります。食事の前後や降園前のひとときなど、気持ちをゆったりとさせながら、お話と出会う機会をもっています。こどもたちが自分でも棚から手に取れる絵本と違い、紙芝居は、大人が用意して「演じ手」にならないとなかなか出会いにくいものです。大人とこどもとの一対一での読み聞かせよりも、友達などと一緒に、そのお話の世界を楽しむことを想定して作られている場合が多いようです。園の中で、こどもたちと紙芝居を楽しむ時にも、登場人物や場面によって、こどもたち同士が体を寄せあったり、食い入るように舞台（紙芝居を演じる時に入れる木製の枠を「紙芝居舞台」と言います）に集中したりする様子があります。絵本や物語の読み聞かせの時とは、少し異なる紙芝居ならではの姿です。

今月、開園記念日のあった附属幼稚園。開園から93年になりました。紙芝居も、その年代ごとに少しずつ揃えてきた経緯があり、たくさんの作品が園内にあります。その中から、季節やこどもたちの気持ち、遊びの様子などもふまえて、翌日に読み聞かせる紙芝居を選んでいきます。ある程度の年代以降の作品は、専用の紙ケースに入った状態で市販されており、ケースを見ればどんな作品が入っているのかわかりやすいのですが、古いものは封筒袋に入っており、これまで手に取りにくい状態でした。今年度になって、事務職員のお二人に、それぞれのお仕事の合間で、古い紙芝居を紙ケースに入れて、作品がわかるように整理し直す作業を進めていただいています。主に昭和10年代～30年代の作品です。それらの作品を見てみると、文章には、その時代背景を反映した内容や言葉遣いなどがあり、そのまま、今読み聞かせしにくいものもありましたが、絵は、それぞれの作風があり、近年の作品にはない美しさが感じられるものが多くありました。

ところで、絵本は「絵」と「文」という作者名が、作品に表記されることが多いですが、紙芝居は、「絵」と「脚本」という表記がされることが多いです。お話が文章として裏面に書かれていることに加えて、声の出し方、間の取り方、紙の引き抜き方などが指示書きされており、まさに「芝居」の「脚本」という表現になっています。最近の作品では、登場人物のセリフの文字が、部分的に異なるフォントを用いたり、大きさを変えたりして表されている作品もあります。絵本のように「聞き手」となるこどもたちが、その脚本部分の文字を見ることはありませんが、「作り手」が意図した脚本を、「演じ手」となる人が解釈して読み聞かせることが求められているようです。

たくさんの紙芝居、絵本、物語などが、こどもたちのために作られています。こどもたちが「作り手」となることもあるでしょう。暑い季節になりますが、暑さをしのいだ室内では、素敵な作品との出会いがあることを願っています。





1くみ

「からだにある言葉のこと」

おうちの方と一緒に収穫して作った梅シロップが、だんだんとしおしおに変わり小さくなってきました。梅のエキスがお砂糖と混ざり合ってきたようです。こどもたちは今日の梅はどんなかなと、毎日楽しみに見えています。「もう飲める？」と楽しみな気持ちをいろいろに表しています。飲める日が来た時には、どんなお顔が見られるかと今から楽しみです。

さて先日、絵本『おさじさん』（童心社、1969年）を1組のみんなと見ました。

おくちの トンネル アアーンと あいて おさじさんは はこびます
たまごの おかゆをはこびます ポッポー

松谷みよこさんと東光寺啓さんのやさしい世界が広がるような一冊です。この絵本の魅力は、お読みになった方に感じていただくとして、今回は「おさじ」のように、語り口について書いてみます。

ある日、嬉しそうに歩いてきた人が言いました。「みて。三つ編みなの。素敵でしょう。ママがむすんでくれたの」と言いました。きっと、ママに結んでもらったそのこと自体がとっても嬉しかったのだろうと感じました。また、梅シロップを毎日見ている中にも「お砂糖が溶けてきたね。」「もう少しで飲めるね」という言葉がありました。心待ちにしていることが伝わってきました。

こどもたちは、あのね、あのね、と話しをしてくれますが、同じ意味でも使っている言葉が様々だと感じました。髪を「むすぶ」と語る人、「しぼる」と語る人のように。梅シロップを「溶けてきた」「もう少し」と「まだできない」は伝わり方が変わるように。おそらく心のもち方が変わっていくように思います。自分の体から出てくる言葉を美しいものにしてみたら、心の中まできれいになりそうですね。『おさじさん』のように、言葉からも楽しい世界を創っていけたら楽しくなりそうですね。そして、自分が耳にする言葉がきれいな言葉であったら、きれいが循環していけそうですね。豊かな世界をこどもたちから教えてもらいました。





2くみ

「いろいろな味わい」

暑さが続く時期になってまいりました。6月初め、ミニ遠足として2組のみんなで自然観察園に出かけると、ビワや梅の実がたくさんなっていました。ビワの実は、枝から直接もいで、皮をむいて食べてみました。自然の恵みが感じられ、おいしさもひとしおでした。

雨の日が続くと室内で過ごすことが多くなっていきました。食後の時間には、大きな紙にクレヨンで絵を描くこともしています。たくさん点を描いたり、長い線を描いたりしてクレヨンならではの描き味を楽しんでいます。そうしているといつの間にか、大きな紙はこどもたちのイメージの世界で一杯になっています。大きな紙にそれぞれ描くわけですから、線と線が重なったり、色が混ざったりすることもあります。ですが、不思議とごちゃごちゃと喧嘩しているようではなく、今ここにしかないこどもたちの世界が映されたような素敵なものになります。描いた絵はダンボールに貼って衝立のようにしてままごとの遊びの中で使うこともしています。

はさみで切る切れ味も独特の心地よさがあります。紙をひたすらに細かく切って、その感触を面白がっている人がいたので、切ったものを使ってケーキを作ってみることにしました。細長い紙を一回でチョキンと切ってケーキの具材を作ります。ケーキという魅力的なイメージもありますが、何より、はさみの切った時の感触、切れ味を面白がって、繰り返す姿がありました。

幼稚園の生活ではいろいろな自然、材料、道具などに関わっていきます。心地よさや、これは「好き」だと感じるような関わり方を見つねながら、繰り返し関わっていく中で、それぞれの面白さを知っていくのだなと感じます。いろいろものとの出会い、関わりをじっくりもつことを引き続き大切にしていきたいと思います。





3くみ

「自然の恵みをいただく」

自然観察園の梅が大きくなり、梅のゼリーを作りたいとアイデアが出たので、梅を収穫しに行くことにしました。木の高い所に残った梅をビールケースに乗ったり、近くの人と力を合わせたりして収穫しました。ザルから溢れるくらいまで収穫した梅を測ってみると11キロもあり、自分たちの体重の半分くらいも収穫したことに子どもたち自身も驚いていました。測り終えた後は梅のシロップを作る準備です。必要な梅を測り、一つ一つ丁寧に梅を洗ってヘタを取り、氷砂糖と一緒に瓶に詰めたら準備は完了です。日に日に氷砂糖が溶け、シロップがだんだん多くなる様子を見るうちに、ゼリーを作ることを楽しみにする気持ちがどんどん大きくなっています。

シロップを作ってもまだまだ梅が残っていたのでどうするか考えていると、おばあちゃんから美味しい梅干しの作り方を聞いてきてくれた人がいたので、梅干しも作ってみることにしました。シロップ作りとは異なり、追熟させた梅からは桃のようなにおいが漂ってきます。「本当にこれで梅干しができるのかな」「甘い梅干しができるのかな」とわくわくと不安な気持ちが入り混じりながらも、教えてもらった作り方を見ながら準備を進めます。梅と塩を交互に容器に詰め、重石を乗せて準備は完了です。一日経っても変化がなく、本当にこれで梅干しができるの？」と半信半疑でしたがもう少し様子を見てみることにしました。土日を挟み、登園してみるとたくさんの梅酢が出てきており、「お水がたくさん出てるよ」と変化していたことを他の人にも知らせ、みんなで嬉しさを感じていました。梅ゼリーも梅干しもすぐには食べられないからこそ、自分たちで一生懸命に準備した物が食べられるようになることがより楽しみになっているようです。

どちらも家庭で調べてきたことの紹介から、みんなでやり方を確かめながら収穫から準備まで自分たちの手で行いました。他にも栽培、収穫したジャガイモでポテトチップスを作って食べることができました。普段あまり触れることがない道具や工程も自分でやってみることで、嬉しそうにする姿がありました。自分で試してみるからこそ感じられることを大切に過ごしていきたいと思います。

